

## 韓国の街角で出会うことば「약(葉)」

林 史樹

■講演者……林 史樹(本学アジア言語学科教授)

■司 会……林 史樹(本学アジア言語学科教授)

### 韓国にみる「健康信仰」

韓国でもっとも多くみかける看板は何だろうか。花屋を意味する「꽃(花)」、あるいは「담배(タバコ)」だろうか。「P C방(ネットカフェ)」や「노래방(カラオケ)」も多くみかけるし、「부동산(不動産)」も目につく。それでも、ずっと以前からいわれてきたものに「약(葉)」がある。これは日本でいう「薬屋」、あるいは「薬局」のことである。

葉の看板がよく目につくのは韓国の人々が薬局に依存し、それだけ社会で必要とされているからにほかならない。そこでは、さまざまなドリンク剤が販売されており、種類もジュースに近いものから、滋養強壮や栄養補給といったサプリメント感覚で飲まれるものまで多種多様である。それくらい韓国の人たちの間では健康が関心事になっており、実際に「健康のため

なら死んでもよい」といった笑い話まである。カラスが精力増強に効くといわれた途端に、町中のカラスがいなくなったといった噂話まで流れる。このような韓国の人たちが一番弱いことばといえば「몸에 좋다(体によい)」である。嫌がって口にしない料理も、まことしやかに効能を説いて、この料理は「体によいのでおあがりください」といえば口にすることまでくれば「信仰」といえなくもない。さらに、東洋の漢方医学に大きな影響を与えた『東医宝鑑』の著者、許浚を輩出したように、漢方の伝統が息づいている。町中に行けば、各個人用に調合された漢方薬を煎じて、一回ごとのパック詰めにしてくれる「건강원(健康院)」まである。そのほか、生薬を扱う市場が多く集まってできた「약령시장(葉令市場)」も多くの人々にぎわう。韓国の人々の生活は、葉と切っても切れない関係にある。



講演する林先生と、飯島先生



大きく「薬」と書かれた街角の薬局の看板

## 韓国社会における「薬」

それでは、「薬」には一体どのような意味があるのだろうか。韓国社会における「薬」の概念、「薬」の使われ方についてみていく前に、まずここで『広辞苑 第5版』（岩波書店、一九九八年）から日本語の薬についてみることにする。

（一）説に「くすし（奇）」と同源か）①病気や傷を治療・予防するために服用または塗布・注射するもの。水薬・散薬・丸薬・膏薬・煎薬などの種類がある。②広く化学的作用をもつ

物質。油薬・火薬・農薬など。③心身に滋養・利益を与えるもの。

比喩的に用いる。④ちよつとした賄賂、鼻薬。⑤ごく少量のたとえ。

一方、韓国の『ウリマル大辞典』（語文閣、一九九二年）によれば、次のようになる。

①病気や怪我などを治したり、予防したりするのに用いる物質。飲んだり、塗ったり、注射したりする。②火薬。③細

菌、虫、獣などを殺す物質。ハエ薬、シラミ薬、ネズミ薬、農薬など。⑤靴クリーム。⑥酒の俗語。⑦アヘンの俗語。⑧賄賂の俗語。

日韓ともに①治療のための物質、火薬や害となるものを駆除するための化学物質、賄賂、麻薬といったところが共通している。日本語には「わずか」という意味が含まれている一方、韓国語には「酒」の意味が含まれているが、これに関しても、日本で「酒は百薬の長」といわれたり、韓国でも薬に少量の意味をもたせた諺があったりすることから、両言語でほぼ重なった意味で「薬」が用いられているといえる。

しかし、「薬」には辞書に載っていない重要な意味がある。たとえば、韓国で「薬」が用いられることばを探すと、ミネラルを豊富に含んだ山からの湧き水を「약수(薬水)」といって重宝する。しかし、これは必ずしも健康維持のための薬と考えているのではない。清らかな水、霊験あらたかな水という意味が含まれてくる。そのほか「약주(薬酒)」や「약과(薬菓)」、「약밥(薬飯)」などが思いつく。薬酒は、日本語で薬草が入った薬効のある薬用酒を意味するが、韓国語では上等な酒という意味で清酒を指すときなどに用いられる。薬菓とは、小麦粉に蜂蜜や水飴を入れてこね、ゴマ油で揚げた伝統菓子のことをいい、栄養価の高いあるいは原料のよい菓子となる。薬飯は、薬菓同様に、蜂蜜、黒砂糖、ゴマ油、醤油、

栗、ナツメを入れたおこわのことで、体によいとされ、宮中料理などにでてる。

以上のようにみると、どうも韓国語という「薬」には、辞書的な意味合いのほかに、「上等なもの、(体に)よいもの」という意味が含まれていそうである。まさに「약고추장(薬コチュジャン)」がよい例で、고추장(コチュジャン・唐辛子味噌)でも、糯米を原料にして普通よりも唐辛子を多く入れてつくった良質のコチュジャンのことを指す。

日本語にも「毒にも薬にもならぬ」といった諺があることから、「薬Ⅱ(身や自分自身にとつて)よいこと、よいもの」といった意味合いが含まれていそうであるが、韓国語では、それがもつと明確に表れている。

それでは、諺にでてくる「薬」にはどのようなイメージがあるのだろうか。

◆개똥도 약에 쓰려면 없다(犬の糞もいざ薬に使おうと思うとなひ)

↓普段は大したことがないものでも、いざ必要なときにはないこと。

◆약은 나누어 먹지 않는다(薬は分けて飲まない)

↓薬でも何でも分けて飲めば効能が半減してしまうということ。

- ◆ 모르면 약이요, 아는 게 병 (知らなければ薬、知れば病)  
知らぬが仏、病は気から
- ↓ 何事も知らなければ心が薬に過ごせるが、知れば気になるし、気を滅入らせること。
- ◆ 약방에 갑초 (薬屋に甘草)  
↓ 漢方薬局に甘草が不可欠であるように、どのようなことにも首をつっこむ人間、でしゃばり、欠かすことができないものこと。
- ◆ 입에 쓴 약이 병을 고친다 (口に苦い薬が病気を治す) 良薬は口に苦し)
- ↓ 耳の痛い忠告こそが、自分にとってよいということ。
- ◆ 병 주고 약 준다 (病気を移して薬を渡す)  
↓ 自分で災いをもたらしておいて、それに救いの手をだして善行のふりをする事。
- ◆ 약은 빚 내어서라도 먹어라 (薬は借金をしてでも飲め)  
↓ 健康第一で金をいとわず薬を飲むように、時を逃がさずに行動しろということ。
- ◆ 약 팔다 (薬を売る)  
↓ 薬売りが効能を述べ立てるように、口達者に話をする事。
- ◆ 성복 뒤에 약방문 (喪服の後に薬屋の門) 葬式済んで医者話)  
↓ すでに後の祭り、対処が遅れたということ。

以上のように、いずれもユニークな諺であるが、薬が身近に感じられる諺がいくつもでてくる。「口に苦い薬が病気を治す」のように日韓で共通する諺もあるが、「薬は借金してでも飲め」などからは韓国社会の健康志向がみとれる。したがって、「薬を渡す」ことはたとえ病気を移した後でも、効果の高い行動となる。なぜなら、「知らなければ薬」が「病は気から」にも通じるように、気持ちを保つものが薬だからである。「喪服の後に薬屋の門」なども、日本の諺では医者が出てくるが、韓国社会ではまず薬であるところが興味深い。

### 「보약(補薬)」をめぐる

韓国には「보신(補身) 体を健康に保つこと」という考え方がある。この語から犬肉料理として有名な「보신탕(補身湯) 犬肉鍋」が生まれているが、この補身湯は日本という「土用の鰻」と同様で、夏の盛りである「삼복(三伏) 三つの伏日」の日によく食される。この補身という考え方が、これを実現する「補薬」 体を健康に保つための薬」とともに、韓国の健康信仰を支えてきたといえる。

補身や補薬と関係し、韓国の日常生活には生薬が入り込んでいる。まさに医食同源ならぬ、「약식동원(薬食同源)」の実践である。夏バテに効くといわれる鶏一羽を煮込んだ料理「삼계탕(參鷄湯)」には、生薬として인삼(高麗人參) 以外に



街角には昔ながらの漢方薬棚をおく薬局も多くみられる

「葛根」〈葛根〉湯を飲む。何よりも、韓国料理に欠かせない「마늘」(ニンニク)〈大蒜〉や「고추」(唐辛子)〈蕃椒〉は生薬の一つである。

以上のように、韓国社会では日常的に生薬を多く目にする。

たとえば、一九八九年のデータであるが、李龍一らが行った調査では、回答者のうち「補薬」として漢方薬の服用経験がある者が六四・四％で、病気の治療のために漢方薬の服用経験がある者が五七・二％であった。効果についても、何らかの効果があつたと感じた者が八割に達し、極めて効果があつたと

回答する者も五割を越している[李龍一ほか 1991: 36-39]。漢方薬服用経験者の全人口に対する割合が記載されていないが、韓国 Gallup 調査研究所が一九九六年に二〇歳以上の男女に対して行った「漢方薬服用経験に関する調査」でも、七七・七％の人々に服用経験があり、五〇歳以上では八四・二％にも及んでいる[韓国 Gallup 調査研究所 1996]。実際に現地でも尋ねても多くの人々が漢方薬の服用を経験していた。

### 人々にとっての「신토불이(身土不二)」

韓国社会において医食同源と同じく高い関心が特に持たれているのが、身土不二である。もともと、身土不二とは「身体(身)と環境(土)とは不可分(不二)である」という意味で、自分の足で歩ける身近なところ(三里四方、四里四方)で育つたものを食べ、生活するのが、体のためによいという考えである[山下 1998: 1]。つまり、生物とその生息している土地、環境とは切っても切れないことをいっている。農業と密接に関わる語が、韓国では食に対する思想、信条として用いられているのである。

たとえば、韓国のコメには身土不二のマークが入っていたりするが、韓国ではとくに国産の生薬が一番よいという認識が強くある。彼らが身土不二を意識するようになったのは、一九八六年から開かれた G A T T のウルグアイ・ラウンドで

韓国が農産物輸入の開放を迫られ、韓国の農協が身土不二を掲げて、国産の優秀性を韓国の国民に訴えかけたのが始まりと聞く。先の山下「1938:157」によれば、一九八九年以降、韓国で盛んに用いられるようになったという。農産物市場を開放する妥結を行った一九九三年を前に大衆歌手のペ・イルホが「身土不二」を歌い、一九九三年には「歌詞大賞」の「国家愛部門」を受賞する。

自国の農産物保護のレベルから始まった身土不二で、韓国で生まれ育った人は、韓国の土壌や水で育ったものに積極的  
に目を向けて、取り込んでいこうとすること自体は決して悪いことではないと思われる。ただ韓国の場合、身土不二が「国産がよい」、「韓国のものがよい」といった、「外国」に対して排他主義をとるナシヨナリズムと強く連動した。

グローバル化が進むことでとかく遠方を見据えがちとなり、また手間をさけ、即効性を期待し、漢方の伝統が根づいている韓国社会でさえ西洋薬を服用する率が圧倒的になっている。しかし、この身土不二を振り返ってみたとき、身近にあるもので、健康を維持できるといえる。つまり、健康の源はごく身のまわりに落ちているのであり、もつと土地に根づいたところを再認識すべきと教えてくれている。また韓国でもそうであるが、漢方は高価というイメージがある。しかし、これも薬食同源、つまり食することが健康につながると考えれば、

これほど安い健康法はないともいえる。

### 最後に

身土不二がナシヨナリズムに結びつけられるのは平和的でないが、身のまわりをみなおすことにつながることは意識したい。先述の薬の概念につながる「薬酒」ならぬ、「薬」が転がっていないか。信仰のレベルまで到達するのは問題である



高麗人蔘が有名な錦山で小売りも行う漢方薬の卸市場

が、たまに遠出して体によい空気「葉気」と心安らぐ景色「葉景」をみて、健康を保つのは現代人にとつて必要なことであるろう。その意味で、隣国の考えにふれることは悪くない。

葉を通してみること、韓国社会に広く支配的な健康信仰に始まり、人々と葉のつきあい方、補葉や葉食同源の視点から食することで健康を保とうとする考え方にふれることができた。さらに、漢方薬と親しんできた風土と、それを支えてきた地産地消にもつながる身土不二、そして、農産物輸入を契機に煽りたてられたナシヨナリズムまで、葉は韓国社会とそこで暮らす人々に密接に結びついている。

#### 参考文献

李龍一ほか

一九九一「都市地域住民の韓薬服用実態とこれに影響を及ぼす要因分析」大韓保健協会『大韓保健協会誌』第17巻1号、pp. 32-49 (韓国語文)

新居裕久

二〇〇〇「医食同源」『ゲェスタ』39号、pp. 68-73

油谷幸利ほか編

一九九三『朝鮮語辞典』小学館

新村出編

一九九八『広辞苑 第5版』岩波書店

ハンゲル学会編

一九九二『ウリマル大辞典 第2版』語文閣(韓国語文)

林 史樹

二〇〇四「現代韓国社会における、健康信仰」日本海学

推進機構編『みんぱくサテライト』とやま報告書』pp.

8-11

二〇〇四『韓国のある葉草商人のライフヒストリー』御

茶の水書房

二〇〇七『韓国がわかる60の風景』明石書店

韓国 Gallup 調査研究所

一九九六「漢方薬服用経験〈漢方医療に対する国民世論

調査〉」(韓国語文)

山下惣一

一九九八『身土不二の探究』創森社

東京外国語大学朝鮮語学科研究室編

一九八四『朝鮮語慣用句集(上)』東京外国語大学

一九八五『朝鮮語慣用句集(下)』東京外国語大学